

新府城

鬱蒼としげる木々の中に埋もれるように、小高い丘に登る階段が現れる。その登り口に立つ「史跡 新府城跡」の石碑。甲斐の虎武田信玄公の後継者勝頼公が築城した城である新府城を、今改めて紐解いてみよう。

武田勝頼肖像…法泉寺提供（甲府市）



武田勝頼

武田信玄の四男であり、甲斐武田家第20代当主。

通称は四郎。当初は諏訪氏（高遠諏訪氏）を継いだため、諏訪四郎勝頼、あるいは信濃国伊那谷の高遠城主であったため、伊奈四郎勝頼ともいう。または、武田四郎、武田四郎勝頼とも言ふ。「頼」は諏訪氏の通字で、「勝」は信玄の幼名「勝千代」に由来する偏諱であると考えられている。



◆なぜ「新府」なのか
新府城と聞いたとき、あなたはどんなイメージを思い浮かべるだろうか。春先の、桃の花の濃いピンクに覆われた艶やかな姿だろうか。紅葉に包まれた小高い丘のような姿だろうか、それとも、「落ち武者の姿が見られるらしいよ……」という噂話の発信源としてだろうか。

八ヶ岳から甲府盆地へ、くさびのように伸びる台地、七里岩の上に作られた新府城。猛将武田信玄の四男勝頼によって築城されたこの城は、石垣の使われない平山城で、天守閣はなかったという。我々がイメージする城とは異なり、大規模な館と考えた方がしっくりくる。
織田軍などの侵攻を受けて、勝頼は戦略的撤退の際に館に火を放ったため、残念ながら現在その姿を確認することはできない。なお、「この城では織田軍の猛攻を防ぎきれ



武田家の領地（最盛期）

ない」と判断して城を出たそうなので、この新府城では合戦は行われていないという。それまでの武田家の本拠地は甲府にあり、現在の武田神社となる「躑躅ヶ崎館」がそれだ。信玄の死後、後を継いだ勝頼だったが、1575年の長篠の戦いで敗戦した後、領国強化に乗り出す。この頃の武田家の領地は、甲斐（山梨）、信濃（長野県）、美濃（岐阜県）、西上野（群馬県西部）、駿河（静岡県中部）、三河（愛知県東部）、越中（富山県）の一部など広範囲に及び、全てを掌握するのに、甲斐国の中心である甲府では、領地の東に寄りすぎて都合が悪くなっていた。背後に山を置き防御には適していたものの、城下町として発展させにくかったことも要因と考えられる。そこで移転先として選ばれたのが、全領地の中心部に近く、塩川と釜無川に挟まれた天然の要害であり、各地につながる街道が交わる交通の要衝となっていた韮崎であった。武田氏発祥の地である武田八幡宮に近いということもあったかもしれない。

衆に新府城築城の人足動員を命じた箇所がある。また、真田昌幸の実弟である加津野昌春（のちの真田信尹）は「真田隠岐守」とも言われており、この名が「隠岐殿」として地名（字名）に残っていたことで、新府城に真田家関わっていたこと、そしてこの遺跡が真田家の屋敷跡である可能性が出てきた。

家臣である武将の屋敷らしきものがあつたということは、少なくともそこに仕える人たちの暮らしがあつたということである。古代の遺跡もあることから、生活の場として選ばれるだけの条件は整っていたように思われる。つまり、ここから町へと発展させる下地はあつたのではないかと考えられるのである。

◆その後の新府城

統治者不在となった武田家遺領をめぐる「天正壬午の乱」（1582年）にて、徳川家康と北条氏直が甲斐に進攻、徳川方は新府城跡を本陣とし、能見城など七里岩上の城に布陣、対する北条方は都留郡を制したのちに若神子城に本陣を置いて布陣した。その後、徳川・北条の同盟が成立し、北条氏は撤退。徳川家が甲斐を所領とし、甲府の躑躅ヶ崎館を本拠とする。のちに甲府城が築城され、城下町が形成されるなど、政治的中心地は完全に甲府に移っており、新府城は廃城となった。
その後、歴史の舞台には上らなくなったが、戦後、1973年に国の史跡指定を受け、2017年には、「統日本100名城」に選定された。

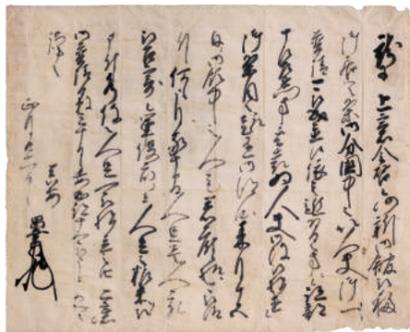
現在新府城跡には藤武神社のほかに建物はないが、武田流築城術の集大成とも言われる丸馬出し、三日月堀や出構などの遺構の姿がその偉さを伝え、いかにも激動の戦国時代の中にあつた城らしいともいえる。古代から人の営みを支えてきた七里岩に刻まれた、「新府城」としての歴史は短いものであつたが、当時に想いを馳せれば、韮崎の新たな一面が見出せるかもしれない。

主な参考資料：

- 韮崎市教育委員会・韮崎市中央公民館「武田の里にらまき って！すげーじゃん！ 新府城」（2018年）
- 山梨県忠北農務事務所・韮崎市教育委員会・財団法人山梨文化財研究所「隠岐殿遺跡Ⅲ 中田町中条地区畑地帯総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」（2011年）
- 韮崎市教育委員会「山梨県韮崎市 史跡新府城跡 環境整備事業にもなう発掘調査報告書Ⅰ」（1999年）

「真田昌幸書状」（韮崎市教育委員会提供）

天正9年（1581年）1月21日に、武田家家臣であった真田昌幸が配下の国衆に人足動員を命じたものとされる。なお、近年天正10年のものではないかという説も出てきている。



▲新府城跡模型（韮崎市民俗資料館展示）



▲新府城参道前の看板

◆新府城の御城印（ごじょういん）
「御城印」とは、半紙（和紙）に城名やゆかりある城主の家紋や花押などの印を押したもので、登城の記念スタンプのようなもので、新府城のものは韮崎市民俗資料館にて入手できる。



▲藤武神社と、そこにつながる長い階段。神社の前身は本丸北東部にあった稲荷社といわれ、新府城廃城後に本丸に移設され、この階段は参道として、その際に設置されたとみられる。